

村 が消えた

むつ小川原 農民と国家

本田靖春

|著者|本田靖春 1933年、京城に生まれる。1955年早稲田大学政経学部新聞学科を卒業し、読売新聞社に入社。社会部勤務、ニューヨーク特派員などを経て1971年退社。著書に『現代家系論』『日本ネオ官僚論』(正・続)『私の中の朝鮮人』『ニューヨークの日本人』『体験的新闻紙学』『私戦』『誘拐』『疵』『不当逮捕』などがある。

むら ^き村が消えた むつ ^小川原 ^{のうみん}農民と ^{こっか}国家

ほん ^だ ^{やすはる}本田靖春

© Yasuharu Honda 1985

昭和60年 3月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——東洋印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫二)

ISBN4-06-183443-6 (0)



講談社文庫

村が消えた

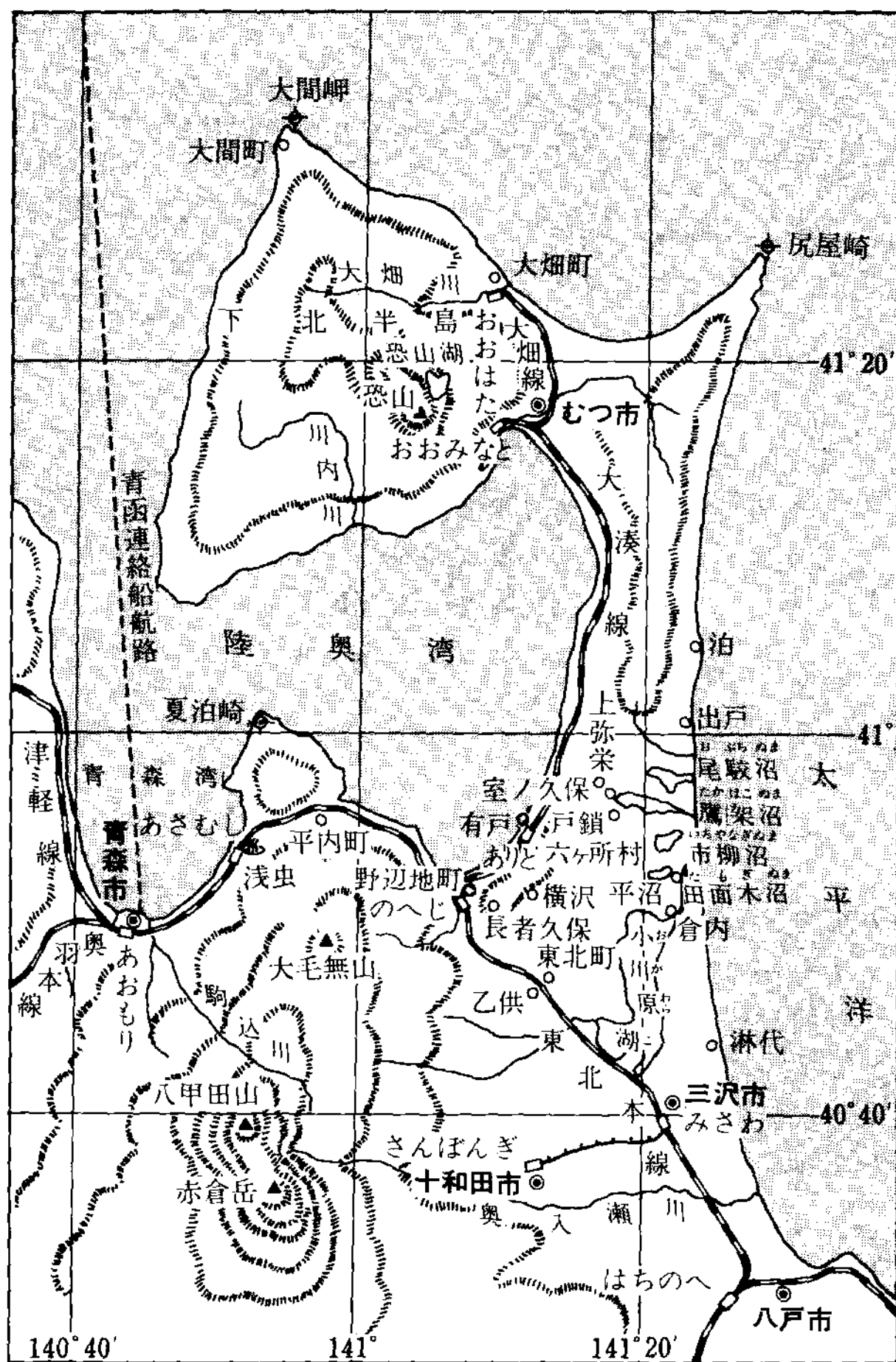
むつ小川原 農民と国家

本田靖春

講談社

目次

第一部	地の果て	7
第二部	望郷	65
第三部	流浪の民	153
第四部	世代の交替	223
第五部	巨大開発	275
	あとがき	330
	主な参考文献	335
	文庫版のためのあとがき	337
	解説——鎌田 慧	341



村
が
消
え
た

第一部 地の果て

第一章

1 上弥栄部落

六ヶ所村の新緑の盛りは六月初旬で、東京あたりにくらべると、ほぼひと月遅い。

晴れた日、肌を染める若葉の照り返しを抜けて、村はずれの高みに立つと、東へ展望がひらける。この時季、目路をわずかでも遮るものがあるとすれば、一番刈りを終えてここここに積み上げられた、牧草の堆積くらいのものである。

足もとから始まる斜面は、なだらかな起伏のたびごと、緑の濃淡を微妙に描き分けながら、やがて沢へ下り、その先の灌木群を渡り、いったんは葦の茂みに消えて、遙かな湖面へと落ち込んで行く。

野鳥の囀^{さえず}りに包まれるであろう訪問者に何の予備知識もなければ、こののどかな田園風景の中から、そこに住みついた人々を近年まで苦しめて来た貧のにおいをかき出すことは、おそらく出

来ないに違いない。

本州の北端に突き出た下北半島をまさかり鉞まさかりにたとえるなら、柄の根本に相当する部分を南北三十キロ、東西八キロ余にわたって占めるのが青森県上北郡六ヶ所村で、広大な面積にくらべて人口は一万一千三百四十二（昭和五十年国勢調査）と少ない。

太平洋岸を帯状に走る、幅約一キロの平野部を除くと、この村はそっくり海成段丘台地にのっている。だからといって山地を想像するのは適当でない。海拔百メートル前後を最高に、内陸寄りから東方ないし東南方、つまり太平洋岸へ向かってゆるやかに高度が下って行く、全体に斜面がちな地形である。

目を楽しませるだけのためであれば、六ヶ所村は人を惹きつけてはなさないのであろう。

海寄りに、北からの順で、尾駸沼おぶち、鷹架沼たかぼこ、市柳沼いちやなぎ、小川原湖おがわらが続く。このうちもつとも大きいのが三沢市との境をなす小川原湖で湖水面積六十三平方キロ。全国で十一番目に広い湖である。

これらの湖沼群を生んだのは、ヤマセの働きだという。この強い偏東風が、太平洋の潮流に運ばれて来た漂砂を吹き上げて砂洲とし、これが海へ注いでいた河川の流れをせき止めて、湖沼を形づくったというのである。

なるほど、太古の名残りは汽水性にとどめられており、これのもっとも強い尾駸沼では、ニシン、ハゼ、コイ、フナ、ワカサギ、エビ、ウナギ、ウグイなど、海水魚と淡水魚の共棲が多種に

わたって見られる。

景色も、険しい山並だけではとなく潤いを欠き、ただの水の広がりはどこかとらまえどころがない。なだらかな台地に、まとまりのよい湖沼群を取り合わせたこの風景は、手頃な心地よさともいったものを訪問者に約束する。そして、豊かさの錯覚を与えずにはおかぬはずである。

春風が桶屋へとめぐって行く論法に従うなら、湖沼からあがる魚類は、ヤマセの恵みということになるのかも知れない。

しかし、それとても漁業を単独に成り立たせるには資源的に不足していて、ときたま食卓にささやかな賑いを添えるに過ぎず、ヤマセは生計の根拠である田畑の作物を冷気で叩いては、地域の暮しを底辺に抑え込んで来たのであった。

父祖代々、ここの住民が味わい続けた苦渋をしのぶには、うららかな日和を避け、この貧の元凶が吹き荒れる日を選んで、六ヶ所村に立たなければなるまい。

四月に入って積雪がようやく消え、下旬から翌五月の初めにかけて、桜前線がゆっくり津軽海峡を北上して行くと、台地は長い冬の眠りから甦る。

まず湖沼に近い湿地でアザミが春の到来を告げ、やがて原野でワラビ、ゼンマイ、フキが一斉

に芽を吹き始める。そして田にはセリ、土手にはヨモギ、タンポポのころ、人びとは苗代を急がなければならぬ。というのも、六月には、オホーツク海の高気圧の産物であるヤマセが、太平洋から吹きつけ始めるからである。

ヤマセの日には海霧が発生しやすく、うすら寒い曇天が九月にかけて、何日もやってくる。平均的な日本人の季節感からすると、上着が邪魔になるころ、ここでは気温が摂氏十度を割り込んで、重ね着をしなければならない。

六ヶ所村の年間平均気温は摂氏九度を心持ち上回る程度で、隣接の三沢・八戸地区にくらべても二度近くは低く、この偏東風はとりわけ寒冷に弱い稲の成育に、大きな妨げとなって来た。

この村でどうやら米が生産されるようになったのは、青森五号、藤坂二号などの改良品種が導入された、大正末期から昭和初期にかけてで、それまで農耕は純然たる婦女子の仕事になっており、男子は樺太・北海道方面へ働きに出るのが通常であった。

昭和四十六年から四十八年まで三沢市民意向調査専門委員をつとめた竹中司郎三沢商業高校教諭は、そこから発展して、六ヶ所村民の意識調査も手掛けた。その折、「生活環境」について寄せた尾駮部落の人々の回答が、村民大方の郷土に対する感じ方を代表しているように思われる。「住みよい」理由の第一に挙げられたのが、「山、川、海、沼、湖などの自然環境がよい」で三九・四パーセントを占めた。

他方、「住みにくい」理由では、「農業、漁業に適さない」と「医師不足」が、ともに二五・〇

パーセントで、同率の第一位に並び、「働くところが少ない」が一七・九パーセントで、こゝ次いでいる。

青森県の「民力」は、沖縄、鹿児島県などとともに、全国でも下位に位置づけられているが、県下六十七市町村の中にあつて六ヶ所村の昭和四十五年度における就業者一人当り純生産額は、四十九万七百二十四円で、最低である。ちなみに、この額は、他市町村平均の六二・六パーセントにしか相当しない。

これでは到底、生計を維持出来ないので、半世紀を越えて出稼ぎが、いまなお盛んである。同じ年度で総世帯数の四九・三パーセントに当る一千百八十六世帯が、働き手を出稼ぎに送り出した。

他市町村の「出稼ぎ率」を見ると、十和田市三・六パーセント、三沢市の九・四パーセントといったように、市部においていちじるしく低いのが目立つ。

これらは比較対象外としても、同じ上北郡にあつて六ヶ所村の西に隣接する野辺地町で二二・六パーセント、その南に続く天間林村で三三・五パーセントどまりである。六ヶ所村の四九・三パーセントというのは、飛抜けた第一位であり、この村が置かれている経済的状况を、何よりも雄弁に物語っている。

出稼ぎ者のうち、六カ月間、家を留守にしているものが四〇パーセントを占め、通年、つまり、盆が正月にしか帰省しないものが一一パーセントもいるのだという。（以上のデータは竹中

司郎教諭の調査による)

六ヶ所村の名称は、明治二十二年の町村制実施に際して、倉内、平沼、鷹架、尾駮、出戸^{でと}、泊の六つの部落が寄り集まったところから出ている。

明治二十四年、東北本線が開通したが、最寄りの野辺地駅が村の中心から十数キロ離れていて、その恩恵に浴するところがきわめて少なく、大正七年の大湊開港、同十年の大湊線(野辺地——大湊間)開通も、同様であった。

周辺地域で進められた交通近代化は、むしろ、六ヶ所村を産業開発から取り残す方向に逆作用したといった方がよい。

つい先年まで、新聞は事あるたびに「陸の孤島」の常套句を六ヶ所村の上にかぶせた。冬季に限っていえば、まぎれもなく、この村は孤絶していたのである。

昭和に入ってから七千前後で推移していたこの寒村の人口が、にわかに急上昇を示したのは、敗戦がきっかけであった。

外地からの引揚者、復員軍人が、開放された国有地に続々と流れ込み、上^{かみ}弥^{いや}栄^{さか}、富ノ沢、野附、雲雀平、大石平、上尾駮、石川、新町、幸畑、新栄、六原、八森、庄内、千歳、睦栄、豊原と、十六の開拓部落を次々にひらいて行つたのである。

これらの名跡に願望としてあらわれている「栄」も「富」も「幸」も「睦」も「豊」も、開拓者たちには縁遠いものであった。

辛酸などというありきたりの表現ではとても足りない、それこそ「血と涙、汗と労苦」の四半世紀が過ぎて、やっと安定がほの見えて来た矢先、開拓部落のいくつかが、解散へと追い込まれる。その一つ、上弥栄部落は、すでにない。四十三戸の人びとは、開拓地を明け渡して、散り散りに去って行った。

彼らの主力は、かつての満洲開拓者であり、揺れ動く昭和史は、生涯に二度、自ら切り拓いた土地を追われるという苦渋を、この人たちに強いたのである。

2 見知らぬ車

ふだんは馬車、冬には馬櫓が長いこと代表的な移動の手段であつた六ヶ所村の村内で、見慣れない東京ナンバーのセダンを見掛けるようになったのは、昭和四十四年の初めころからである。

白一色のスロープを、ジープでもあればともかく、華奢な車体でのぼりおりする遠来のセダンの出現は、いかにも時季はずれで、話題に乏しい冬ごもりの村民に一つのなぞを提供した。

彼らは、そのなぞを冬のあいだ中、頭の中で、転がしながら、だれもが解き明かすにいたらない。

夏場でさえ観光客の訪れは皆無に近い六ヶ所村である。いくつかの行商人宿を数えるだけで、まともな宿泊設備を持たない僻地の村へ、よりによって厳寒のさ中、目的もなしにやってくる酔